



退官にあたって

外科治療学講座・腎泌尿器外科学分野 教授 小柳 知彦



札幌に生まれ育った私はインターン・レジデントの卒後修練6年間を本州・米国で過ごした後、昭和45年母校へ戻りました。以来33年間の北海道大学勤務ですからこれまでの人生の半分以上を務めさせていただいた事になります。殊に後半の21年間は教授として泌尿器科学講座をとり大学人として求められる教育・研究・診療・社会的貢献に多くの教室員とともに励んできました。教授就任時は具体的には(1)腎泌尿器外科としてのアイデンティティの確立、

(2)臨床重視の視点と患者本位の医療の実践、(3)研究成果の発表と交流によるグローバル化の3つを大きな目標として掲げました。果たして成果の程はとなると内心忸怩たるものがありますがそれでも一つ目については医学研究科への移行に伴って高次診断治療学専攻外科治療学講座腎泌尿器外科学分野へと改組され基盤が整備された事、二つ目については臨床への還元を念頭に絶えず研究の遂行が図られ、臨床の現場においては従来のパターンリズムではないインフォームドコンセント、エビデンスに基づいた臨床が日常的に実践される様になった事、三つ目についても海外との垣根を感じさせない活動が頻繁に行われる様になった事などからある程度の成果はあったのではと自己評価しています。33年前米国を離れる際、恩師のミシガン大学泌尿器科ネズビツ

ト教授から次の様なアドバイスをいただきました。「帰国後は若い人の教育に従事出来るとうわくわくする特権を満喫してほしい、これこそが病める人々の診療に従事するのと同じく臨床医が果さねばならぬ義務であり1人の人間にとって最も満たされる事である」とのアドバイスです。一方、臨床医学の父とされるオスラーの医の哲学で強調されているのは「この世の中から何かを得ようとするのではなく何かを与えるべく誠実に仕事をする事」としています。在任期間中にもし成果があったとしたらこれもこれも先達の教えにある大学・医育機関としての特権を生かして多くの教室員、共同研究者とともに教育・診療・研究・社会貢献と云う大学・医育機関人が求められる仕事をオスラーの医の哲学で唱えられている様に誠実に実践してきたからこそと認識しています。「元来教育には与えた以上のものが返って来る」(Kassier, J.: N. Engl. J. Med., 1996)と云われますがこの言葉を実感しつつ大学での仕事を終え去る事が出来るのは大変幸せな事と思っています。

医学研究科・医学部の諸先生には一方ならぬお世話になり感謝の気持ちで一杯です。この4月からは道東の釧路市にある労災福祉事業団釧路労災病院院長として勤務予定です。スタッフの交流や北海道大学医学部附属病院卒後臨床研修制度における病院群の1つとしての役割を通じて今後とも北海道大学医学研究科・医学部との関係は大切に続けていくつもりですのでよろしくお願い致します。

長い間の御好意に感謝し退官のあいさつとさせていただきます。

退官にあたって

侵襲制御医学講座・侵襲制御医学分野 教授 剣物 修



北海道大学での17年有余の職責を健康を害することなく全うできたことを心底嬉しく感じている。この間、数え切れない程のご指導と御支援を頂戴した諸先輩そして同僚に心から感謝申し上げる。北大で培った夢と希望と勇気をこれからの人生の糧にしていく所存である。

3月4日の最終講義では「侵襲制御のコンセプト」と題して、1) 麻酔科医の仕事、2) 侵襲制御医学とは、3) 研究の紹介について講義させていただいた。1) に関しては医学研究科長を始め基礎系の教授の方々に私共の仕事を理解して欲しいと考えたからである。手術部での麻酔業務、集中治療部、ペインクリニック、高気圧酸素治療室での業務内容を紹介した。日本では麻酔科医が不足している。北大病院でも例外ではないが、私の在任中に100人以上の麻酔科専門医を育成することができたことは大きな喜びであった。集中治療部を開設し、急性期の重症患者を効率よく治療できるようにした。その延長で救急医学分野の開講そして救急部の活性化

を実現できた。北大病院が北海道における基幹病院として真のメディカルセンターの役割を担うことが可能となった。御理解と御協力を頂戴した歴代の病院長始め多くの先輩に、そして何よりも一緒に日夜努力してくれた教室員に感謝したい。これからは全病院的サポートの下で、その機能が十分に発揮されることを期待している。2) 侵襲制御医学については、従来の麻酔科学のコンセプトをよりグローバルな観点から捉え、臨床麻酔(手術室での業務)、ペインクリニック(痛みの治療)、集中治療そして救急医学を包括する新しい体系の医学実践の場であり、研究分野であることを提言した。麻酔および手術による侵襲を臨床麻酔の場で制御する。痛みによる肉体的、精神的侵襲をペインクリニックの場で、手術後の大きな侵襲、急性期重症患者の侵襲を集中治療部で、急性期の炎症、虚血外傷などによる侵襲を救急部で、それぞれ制御する、というコンセプトである。近年欧米においても麻酔科医をperioperative physicianとし、perioperative medicineという医学分野の誕生を見ている。侵襲制御医学のコンセプトと相通じるものである。3) 研究面では、単に麻酔薬の薬理学的、生理学的作用にとどまらず、麻酔の機序、脳虚血の保護、SIRS、Shock、MODSの病態解析、さらには外傷、虚血、炎症などの生体侵襲負荷時の生体反応の解析、など様々な分野を有機的に統合した学問を臨床的視野に立っての推進が必要である。このことはリ

サーチマインドを持つ臨床医の育成に不可欠のものと信じている。この講義は名誉教授、同僚教授、看護部、学生そして同門と多くの方々にお聴きいただいた。その中で講堂の中央、ちょうど私と目線の合う位置で恩師の札幌医科大学名誉教授高橋長雄先生がじっと、時折頷きながら私の講義に耳を傾けて下さっていた。3月5日、恩師からの手紙が届いた。「素晴らしい最終講義でした。本当に素晴らしい講義でした。講義終了直後になにかじっとしていらなくなり、廊下の方に動いて行きました。…私としては熱に浮かされたように…、そして帰宅し、興奮のあまりこの手紙を書き始めました。私が卒業後北大のためにしてきた仕事のうち最大のものはお礼状を北大に推薦したことだと一人でしきりに合点

しています。本当に素晴らしい講義でした。短時間のうちに見事にまとまっていて、何と言っても素晴らしい講義でした。」私はこの手紙を何回も何回も読み返した。人を余り誉めることになかった恩師が、率直なお気持ちを私に伝えてくださった。これで恩師に本当の意味での恩返しのできたのだと思った。御案内を差し上げて良かった。これからも恩師の背を見ながら、名誉教授として、一麻酔科医として、北海道大学の発展のために寄与できるよう努力して行きたい。最後になりましたが、北海道大学大学院医学研究科、北海道大学医学部の今後益々の発展と皆様の御多幸と御健勝を祈念している。長い間、本当に有り難うございました。

退官にあたって

神経病態学講座・神経内科学分野 教授 田代邦雄



昭和62年5月に北大医学部附属病院に診療科として神経内科が新設され、同年7月に教授として発令を受けましてから、医学部神経内科学講座、そして医学研究科神経内科学分野への変遷、その15年9ヵ月にわたり神経学・神経内科学の教育・診療・研究を、諸先生のご協力・ご理解のもと、教室員そして同門一同と共に発展させる事が出来たことに対し感謝を表させていただきます。

昭和33年4月に北大に入学、その前年までは教養部医学進学課程は札幌医大と一緒に、2年修了後に両大学の専門課程へ進学するという制度になっておりましたので、私ども同期生はそのまま北大専門課程へ進めるクラスの1期生として、この広大なエルムの学園でクラブ活動も含め、青春を謳歌したものでした。

教養時代、創部されたばかりの医学部卓球部に所属、専門課程の先輩から卓球ばかりでなく勉強の一端も学べたことも貴重な経験でした。卒業後は当時インターン闘争の始まりの頃でしたが、横須賀米国海軍病院でインターン生活を送り、その各科の研修ローテーションの始まりが脳神経外科、最後に神経内科という、学生時代から神経学を専攻したいと思っておりましたので又とない組み合わせとなり、かつ、この期間に臨床の米国留学には必須のECFMGを受験することが出来ました。

北大の伝統、フロンティア・スピリットを見出すべく、当時は神経内科がやっと日本の大学に誕生し始めたばかりの頃にあたりましたので、恩師の脳神経外科・都留美都雄教授のご紹介で米国

に留学、神経学を修め5年後に帰国、北大に神経内科の芽を植え、若葉から一本の若木に育つ役割を果たして参りました。これからはエルムの大樹のごとく、しっかりと根を張り天空に聳えるごとく発展していく事を期待している次第です。

教授会ではいろいろな委員会にも参画させて頂きましたが、診療科教授がスタートでしたので、直ちに病院の交通委員会委員長を命ぜられ、病院職員駐車場104台に対し400枚以上の構内通行証が必要な理由を全学交通委員会でも毎回説明させられたこと、また、通常は2年間と聞いていた教務副主任を3年間、西教務主任と共に務めた頃は神経内科教室の仕事の多忙な時期とも重なり大変でしたが、今となれば、これも懐かしい思い出であります。

専門医の育成、基幹病院に診療科の設置、神経疾患には所謂「難病」が多いことより厚生省（現厚労省）の多くの研究班に所属し活動、そして専門分野での研究成果の蓄積を重ねてきたことは教室業績集として纏めたいと存じますので御高覧頂ければ幸いです。

北大神経内科として、日本神経学会総会、日本神経治療学会、日本神経免疫学会、脳のシンポジウム、そして、厚生省（厚生労働省）研究班としては最も長い歴史と伝統がある「神経変性疾患研究班」を担当できましたことは教室の今までの証であり、ご支援下さった各位にこの場を借りて厚く御礼申し上げます。

4月より北海道医療大学心理科学部に所属し、40有余年の親友である同期の阿部和厚教授の隣の部屋に居を構え、神経学、ニューロサイエンス関連の学生講義や、今まで関与してきた日本の神経学関連の仕事のお手伝いもしていきたいと考えております。

独立行政法人化を始めとする国立大学の大きな転換期にあたるこの時、北海道大学の英知を結集し大いなる発展をされることを祈り、退官のご挨拶に代えさせていただきます。

医学研究科長・医学部長再任のご挨拶

分子生化学講座・分子生物学分野 教授 西 信三



医学研究科長・医学部長に再任され、4月1日より2期目の任務に就いております。

前期の2年間に、皆様から頂きました暖かい御支援は誠にありがたく、ここに厚く御礼を申し上げますと共に引き続き宜しくお願ひ申し上げます。

「年頭にあたり」という題で本広報1月号に本年の抱負として、本年中に実施がほぼ確定している事柄およびまた現段階では希望に過ぎない事などを述べさせていただきました。

学士編入学、修士課程、保健学科の設置、医歯学総合研究棟（仮称）の新築、研究棟の大型改修、遺伝子病制御研究所と共同利用予定の新研棟、COEプログラムなどですが、かなり詳細に述べました。今回はそれらのうち新たに確定した事柄を

主に記します。

施設関係では上記の総合研究棟の竣工は早まり、平成16年3月の予定となりました。また南研究棟の大型改修は平成14年度補正予算で行われる事となり平成15年度中には完了します。他の研究棟については概算要求をしております。

保健学科の設置は平成15年度予算で認められ、平成15年10月1日に設置されます。学年進行に伴って整備され、平成19年4月に完成する予定です。医学部保健学科設置準備委員会で作成した設置計画書（教員組織を含む）が認められたものがありますが、5月8日開催の医学部教授会でも承認されています。表を参照ください。平成16年4月には新入生を迎えます。

昨年来、新聞、テレビで報道されております「医師の名義貸し」の問題は大変に遺憾な出来事です。しっかりと襟を正し、徹底した調査を行い事実関係を明らかにする予定で5月13日に「名義貸し問題調査委員会」の第1回会合を開き、調査を開始しております。調査委員は医学部教授14名と法律に詳しい外部委員2名で構成しています。

第一次調査の対象は現在の在籍者約1000名ですが、次いで第二次調査の対象は過去5年間の在籍者約2000名です。関係各位の御協力をお願い致します。調査の上、改めるべきは改めま

す。
私は医学研究科・医学部の発展をキーワードに全力を尽くすつもりでおりますので、御協力の程を重ねてお願い申し上げます。

表 保健学科の講座編成

専攻名	講座名	分野名	教(一)				入学定員	
			教授	助教授	助手	計	1学年	3年次編入
看護学	基礎看護学	基礎看護学	1人	1人	2人	4人	70	10
		看護管理	1	1		2		
	成人・老年看護学	成人看護学Ⅰ	1	1	1	3		
		成人看護学Ⅱ	2		1	3		
	母性・小児看護学	老年・精神看護学	1	2	2	5		
		母性・助産学	2	1	3	6		
地域保健看護学	小児看護学	1		1	2			
	地域保健学	2	1	2	5			
計			13	7	13	33		
放射線技術科学	放射線技術学	臨床画像技術学	1	1		2	37	3
		放射線治療技術学	1		1	2		
		医用核技術学	1		1	2		
	医用理工学	医用情報科学	1	1		2		
		医用物理工学	1	1		2		
		医用量子線工学	1		1	2		
計			7	3	3	13		
検査技術科学	生体情報学	分子化学検査学	1	1		2	37	3
		生体防御検査学	1		1	2		
		感染制御検査学	1		1	2		
		検査管理開発学	1			1		
	病態機能学	血液病態検査学	1		1	2		
		生理病態検査学	1	1		2		
計			7	3	3	13		
理学療法学	基礎理学療法学	生体機能制御学	1	1		2	18	2
		動作機能障害学	1		1	2		
	臨床理学療法学	障害代償学	1	1	1	3		
		病態運動解析学	1		1	2		
計			4	2	3	9		
作業療法学	基礎作業療法学	機能構造解析学	1	1		2	18	2
		作業行動科学	1		1	2		
	臨床作業療法学	精神障害系作業療法学	1	1	1	3		
		身体障害系作業療法学	1		1	2		
計			4	2	3	9		
合計			35	17	25	77	180	20

病院長就任にあたって

機能再生医学講座・形成外科学分野 教授 杉原平樹



平成16年度の「国立大学法人化」という組織改革の中で、医学部附属病院もまた大きな機構・組織改革を求められています。今、全ての国立大学医学部附属病院が多くの課題に直面していますが、北大医学部附属病院の現状について触れたいと思います。

1. 医学部附属病院と歯学部附属病院の統合

今年10月には、医学部附属病院と歯学部附属病院の統合が15年度

概要要求の手続きを経て決定しています。医科診療・歯科診療の統合による総合的医療の実践をととした「全人的教育」と患者サービスのための環境を道内唯一の医療施設として整備することが重要です。一方で、この統合には「法人化」を見据えた大学附属病院の経営・管理・運営の効率化も求められています。したがって、医病・歯病統合は採算部門を創設した「メディカルセンター」の新営なしには、その目的を全うすることができません。残念ながら、15年度概要要求致しました「医歯総合メディカルセンター」の新営は認められず、16年度も引き続き、医病・歯病の総力を挙げて強気に押し進めたいと考えています。

2. 特定機能病院の包括評価制度の導入

本制度を既に4月から導入している大学附属病院も有ります

が、北大は6月1日からの稼働となります。全国82の特定機能病院の診療報酬請求が出来高評価ではなく、DPCによる診断群分類により、包括評価として診療報酬請求を行う新しい制度です。但し、手術、麻酔、放射線治療、内視鏡検査ならびに1000点以上の処置などは出来高評価で行われます。出来高評価制度の中で、北大病院職員全員の意識改革と職域での努力で、単年度収入増の傾向を維持してきましたが、今年度以降は極めて困難な状況になることが想定されます。現在、本評価制度の管理・分析を行うと共に、医師・看護師への説明と理解、報酬請求システムの整備、患者さんへの説明等、具体的な課題とその運用について「包括評価管理・分析室」ならびに「包括評価管理・分析特別部会」で検討を行っています。

3. 卒後臨床研修の義務化

平成16年度から卒後臨床研修が義務化されます。北大医学部

附属病院では、この義務化を見据えて、平成13年度より北大方式として卒後臨床研修を実践しており、卒後臨床研修センターを中心に特徴あるプログラム作成を検討しています。現在、北大附属病院としては、1年目（内科6ヶ月、外科3ヶ月、救急部/麻酔科3ヶ月）、2年目（小児科1または2ヶ月、精神科1ヶ月、産婦人科1または2ヶ月、地域保健・医療1ヶ月、選択科8ヶ月）のプログラムで道内関連病院との「たすきがけ方式」を実施することとし、アンケート等により関連病院の意向を調査中であります。未だ研修医の給与等処遇面で不明な点も多く有りますが、6月のマッチングの稼働に向けて作業を進めています。

以上、医学部附属病院固有の課題について述べました。これらの組織改革や制度改革には必ず痛みをとまいますが、若い教官の方々により良い大学病院としての環境を残すべく、関係各位のご支援、ご理解を頂きますようお願い申し上げます。

病院長退任にあたって

癌診断治療学講座・腫瘍外科学分野 教授 加藤 紘之



平成15年3月末日をもって医学部附属病院長を退任致しました。私にとっては、「長い2年間であった」との感慨があります。それは関与を深める程に多くなる仕事量とその成否が多岐の方々、ひいては全病院、医学部の命運をも左右しかねない事柄が山積みしていたからであります。要因の一つには本年6月に控えた日本外科学会の準備作業にも相当量のエネルギーが必要でしたし、もちろん腫瘍外科教授としての日常

診療、研究指導を継続しつつ、仕事をこなしていかなければならないことがあり、端的に言えば少々「疲れた」後半の1年間でありました。

経験を振り返ってみますと就任早々、医療システムの更新期にあたり、入札後の機器導入が順調でなく、このまま行くとコンピューターが作動せず、全病院機能が停止するところまで追い込まれていました。この時、私は日本のトップクラスの実業家と渡り合い、「全面辞退」を取り付け再入札に持ち込むことでこれを乗り切ることができ、ほっとした事を思い出します。大きな課題は国立大学の独立行政法人化への移行の中で附属病院をどう運営するかでありました。特に経営面で「赤字」と表現される病院経営につき、病院は医療人を育成する教室であり、ここが健全に運営されない限り良質の医師を世の中に送り出すことは出来ない旨の発言を全学の各種会議で繰り返し、ほぼその了承を得たものと

思っております。身近な問題としては歯学部附属病院との統合がありました。ねばり強い話し合いと総長、井上副学長の御指導も得て、文部科学省に何度も出掛け、ついに本年10月1日からの統合が認められました。それに伴いこれからの病院運営には病院長を専任化する必要がある旨を訴え、全学の承認を得たことは将来の病院発展に寄与するものと信じています。残念な事に統合に伴う新棟の建築は国家予算全体の削減の煽りを受けて実現しませんでした。次年度には必ずやスタートできるものと信じています。

日常的に出喰わすのは医療事故のことであります。インシデントレポートを見るたびに一つ間違えば大きな事故につながったのではと背筋を寒くしておりましたが、職員の努力で大きな事故は発生せず、繰り返し事故予防を呼びかけた甲斐があったと嬉しく思っています。卒後臨床研修必須化も大きな歴史的転換でありまして、医療組織形態の変化を引き起こすに違いありません。この点も浅香教授を中心とする卒後研修センターの皆さんに大変なご努力を頂きました。在院日数短縮、地域医療との連携、医療裁判の鑑定人協力など、附属病院が社会に果たす役割も重要課題としてとりあげました。

こうして振り返ってみますと、医学部および附属病院に働く全ての皆さんに手厚く助けられてなんとか任務をまっとうできた事をつくづくありがたいことと実感します。杉原平樹新病院長は小林邦彦教授とともに副病院長としていつも支えてくれた同期の盟友であり、素晴らしい指導力と明るさを持ち合わせております。何ん的心配もなく後事を託すことができます。

私に頂いたと同様のお力添えをお願いして、退任のご挨拶とさせていただきます。

教務主任就任にあたって

社会医療管理学講座・医療情報学分野 櫻井 恒太郎



この度、教務主任のご指名を受け光栄に思うと同時に、長嶋前教務主任より仕事の引継ぎをうけて内容を知るに従い、ますますその重要さと責任を感じております。

昨年までの2年間は学生委員として他学部の教官とともに大学祭やサークル活動などの世話をさせていただきましたが、医学部には学生委員会が無いため本来の教務に関わる業務のみならず学生の生活指導やメンタルヘルスマでも教務の教官が担当しなくてはなりません。幸い副主任として小山教授に御就任頂きましたし、医学部には医学教育に熱心な多くの教官がカリキュラムや教育内容の改善に献身的な努力をしてくださっていますので、私も微力ながらそのお手

伝いをさせて頂きたいと思っております。

早速に新入生の合宿研修に参加して日高少年の家で楽しい1日を過ごしてきました。参加いただいた9名の教官からそれぞれ30分ほどの講義があったのですが、新入生の輝く目とサークル勧誘に来る先輩の熱意を見ると、羨ましくもあり、また教官としての意欲を掻き立てられる時間でもありました。昨年、医学部・医倫理学と医療情報学の不合格者に面接試験をして不合格の原因を聞いてみたのですが、スポーツなどに熱中しているいわば確信犯の不合格者が多かった中で、自分の将来にはどのような進路の選択があり、どのような適性と感性が必要かについての情報がないために、勉学の方向と意欲を失っているのではないかと思われる学生も見うけられました。早い時期から医学部卒業生の多彩な進路と活躍を紹介すれば新入生が次のハードルを設定する刺激になるのではないかと考え、日高の研修では卒後10年の先輩の仕事場所を紹介してみました。過去80年の先輩諸氏の努力の跡が学生の目標となるようにデータを揃え、機会をみつけて学生に紹介

してみたいと考えております。

このほかにも、新カリキュラムの整備、修士課程カリキュラムの改変、CBTやOSCEの整備、夏季自主研修、学士編入学、学位審査など多くの教務関係の検討事項があり、それぞれ多数の教官の御尽力により進められております。ちょうど教務掛も交代期に当

たりましたので、私同様に不慣れな点があり皆様にご迷惑をおかけすることがあるかと思いますが、引き続き御協力くださいますようお願い申し上げます。教官、学生諸氏ともになにかお気づきの点がありましたら遠慮なくメールやお電話をください。

(内線 6 0 1 7, tsakurai@med.hokudai.ac.jp)

教務副主任就任にあたって



宮坂和男教授の後任として、教務副主任を拝命しました。この数年間、医師国家試験問題作成幹事委員など学外の任務に忙殺されていたこともあり、正直申し上げて、当初は教務副主任の何たるかもわからず困惑していました。幸いにも、宮坂教授からご丁寧な引継をいただき、教務の実情についておおよその理解を得ることができました。

新たな重要課題として、平成15年度入学生から始まった新カリキュラムの導入があります。その構成は、医学教養コース（1年6ヵ月間）、医学基礎コース（1年間）、基本臨床コース（1年6ヵ月間）、実習コース（2年間）から成り立っています。平成7年に始まった学部一貫教育による現行のカリキュラムと比較して、臨床実習により重点を置いた時間配分となっています。シラバスの作成、授業や実習の内容の検討など、モデル・コア・カリキュラムを中心とした新カリキュラム策定のための作業が急務となっています。各科の担当教授と臨床系カリキュラム実施委員の先生方のご協力、ご助言をよろしくお願い申し上げます。

現行の臨床系カリキュラムのなかには、ここ数年来新しく導入され、内容のさらなる充実と新カリキュラムへの組み入れが期待される試みとして、診断学実習、自主演習、客観的臨床能力試験

神経機能学講座・精神医学分野 教授 小山 司

(OSCE)があります。診断学実習はM5学生が医療面接・診療録記載、身体所見の取り方、救急対応、外科基本手技など10コースを10日間でローテーションするものです。学生には大変好評であり、診療重視の新カリキュラム策定を視野におきながら、講義内容、ビデオと講義の組み合わせ、ローテーションの方法などについて検討を重ねて行きたいと思っております。自主演習はM6学生が夏季に6週間、自主的に臨床を演習する正規の授業です。学生各自が先行する臨床実習で得た体験と関心を基に、自由に学習内容を決定し臨床体験を深めるものです。その実施にあたっては、各科ならびに関連施設の先生方の絶大なるご協力を得ています。改めて感謝申し上げます。OSCEは医療面接や身体診察などの基本的臨床技能をテストするものですが、近い将来医師国家試験の正式な試験科目となる予定になっています。現在はまだトライアルの段階ですが、試験場所の確保、標準化のための評価者トレーニング、外部評価者の乗入れなどの問題を解決し、M6学生全員にOSCEを行う必要があります。

大学は今大きな地殻変動のなかにあります。システムの形式上の変化に囚われ、ともするとあるべき本来の方向性さえ見失いがちです。今こそ、大学の基本的使命である「知の創造（研究）」、「知の伝達（教育）」、「知の応用（診療）」の意味を再認識すべき時期だと思っております。なかでも教育こそは全ての基本にある一義的課題ではないでしょうか。教官の先生方には、現行のカリキュラムの改善と充実、新カリキュラムの策定にあたりまして、一層のご助言、ご協力を重ねてお願い申し上げます。

教授就任のご挨拶

機能形態学講座・組織細胞学分野教授 岩永 敏彦



組織細胞学分野（旧第三解剖）阿部和厚名誉教授の後任として2月1日に着任しました。日本で一番（恐らく）キャンパスがきれいな北大獣医学研究科の解剖学教室で一年半にわたり「別荘生活」を送り、学内異動の形で移ってきました。

1954年佐賀県有田生まれで、帯広畜産大学の獣医学科を卒業後、修士課程に進学しました。そのとき解剖学講座に属し、形態学の基本技術を習うとともに消化管内分泌細胞の免疫組織化学・電顕観察を行いました。その後、新潟大学の医学研究科（博士課程）に進学し、消化管ホルモン研究のメッカのひとつであった藤田恒夫教授の下で助教まで勤めました。この間消化管内分泌以外に、神経特異蛋白や神経ペプチドの免疫染色、腎炎・心筋炎・勃起のメカニズム、腸上皮のアポトーシス、粘膜免疫など雑多な研究をしてきました。研究には「発作」とともに「遊び」が必要であることを教えられたものもこの時です。また、教科書の作り方（体力と時間のある若いうちに書くべき）、講義の仕方（学生の好奇心をくすぐれ）、論文の書き方（実験しながら論文を書け）、形態学の心構え（自分の目で見ただけのしか信じるな）などの指導を受けました。

北大獣医学部では、さらに関節滑膜の細胞構築、エストロゲン

受容体、ATP受容体、新規プロテアーゼ、細網内皮系、クリプトパッチなどの研究を行うとともに、学外からの依頼研究を多数引き受けました。自分の能力を超えるほどの依頼研究を引き受けた際には、解剖学の必要性、存在価値を認識してもらいたいという希望があったからです。

今後の研究の柱のひとつは、キチナーゼファミリー蛋白の細胞レベルでの研究です。ほ乳類動物もキチン分解酵素を消化酵素としてもっています。鳥類やげっ歯類は大量の酵素を分泌しますが、甲殻類（の外皮）や昆虫をさほど食べないヒトでは産生量が少ないようです。重要な点は、関連の蛋白群が関節炎、がん、動脈硬化、アレルギー、寄生虫感染に伴って増加する物質として見ついていることです。これらは細胞表面および細胞間質の糖鎖を認識することで、細胞の増殖、分化、移動に深く関わっています。この研究テーマは、ポストゲノム時代にもマッチしているという安心感もあります。もうひとつのテーマは、千葉大学清野進教授（四月から神戸大学）との共同研究で、分泌を調節する分子機構を解明することです。分泌は細胞応答の代表的な現象で、内分泌、外分泌だけではなく神経伝達、サイトカイン放出にも共有されています。この共同研究では、私は免疫組織化学（光顕・電顕レベル）、細胞レベルの遺伝子発現、ノックアウトマウスの解析を担当しています。もちろん、本研究科内でも夢のある楽しい研究には大いに協力致しますので、お気軽にご相談ください。

平成14年度医局対抗サッカー大会

大学院医学研究科（神経機能学講座精神医学分野）松山哲晃

日韓ワールドカップの興奮も冷めやらぬ平成14年秋、毎年恒例の医局対抗サッカー大会が開催されました。本大会はまだ歴史が浅く、今回で第6回を数えたばかりです。しかし年々、参加チームが増えるとともにレベルアップも著しく、各チームの実力もより拮抗してきている傾向にあり、近年の日本サッカー隆盛の縮図、といっても過言ではないほどの発展を見せています。また参加者の年齢層は20代から60代までと幅広く、国籍も多彩で、学内のよき交流の場としての役割も担っているといえるでしょう。会場は西区八軒の農試公園ツインキャップ（屋内グラウンド）で行うためフィールドは通常のものより狭く、フィールドプレーヤー6人、ゴールキーパー1人の7人制で行われています。今大会は計14チームが参加し、まず11月2・3・4日に3グループに分かれて総当り、1試合15分ハーフの1次リーグ戦が行われました。その結果、前大会優勝の精神科、初出場の生体医工学・スポーツ診療科、本大会では草の根的存在の第一内科、準優勝歴をもつ循環器内科、1次リーグ初突破の第二内科、イングランド代表のレプリカジャージが眩しい第三内科、過去2大会連続で4位入賞の泌尿器科、サッカー部OBでメンバーを固めた整形外科の8チームが勝ち上がりました。決勝トーナメント戦は11月30日に1試合20分ハーフで行われ、激戦の末、組織的な守備とカウンター攻撃が持ち味の精神科と、個々人の高い技術に裏打ちされた爆発的な攻撃力を誇る整形外科が決勝戦に駒を

進めました。決勝戦は整形外科が1点先制するも、精神科が逆転。特に後半に入ってから圧倒的なボール支配力で攻め続ける整形外科と、それを泥臭い全員守備でしのぐ精神科による過去に類をみないほどの激しい攻防となりましたが、精神科がろうじて逃げ切り、3対2で接戦を制して通算3度目の優勝を飾りました。

本大会も、公正かつ的確なレフェリングでスムーズな大会運営に貢献して下さいました医学部サッカー部の皆さんと、声援で選手を励まし試合を盛り上げて下さった多くの観客の方々に支えられ、幸い大きな事故もなく終えることができました。今年以降も、たくさんのチームが参加し、本大会をますます盛り上げて下さることを期待しております。



◆ 医学部学位記伝達式行われる ◆

平成15年3月25日（火）午前10時から本学体育館において、大学としての学位記授与式が挙行されました。これに引き続き、午後1時から本学部臨床大講堂において、学位記伝達式が行われました。

本学部の教官及び父母等の見守る中で、長嶋教務主任よ

り卒業生93名の名前が呼び上げられ、西学部長から、ひとりひとりに学位記が手渡されました。

学部長のお祝いのことばに引き続き、齋藤和雄同窓会長より祝辞をいただいた後、第79期卒業生を代表して、庄野雄介さんが答辞を読み上げました。

◆ 平成15年度大学院入学状況（博士課程・修士課程） ◆

平成15年度の医学研究科博士課程入学者数は、社会人入学者7名を含め88名、（男72名、女16名）でした。専攻別の内訳は右表のとおりです。

医学科専攻修士課程入学者は32名（男21名、女11名）です。

平成16年度医科学専攻修士課程の募集要項は、6月中旬に印刷公表される予定です。また、医学部ホームページでも併せて公表される予定です。

募集要項の請求は、6月中旬以降に医学研究科・医学部教務掛あてに行ってください。

専攻区分	定員	入学者数（うち留学生）
生体機能学	20	3
病態制御学	30	34 (4)
高次診断治療学	24	32
癌医学	12	4 (1)
脳科学	4	9
社会医学	10	6 (4)
	110	88 (9)

◆ 平成15年度医学部学士編入学状況 ◆

平成15年度学士編入学試験の結果、5人が入学しました。選抜方法は第1次試験で筆記試験「生命科学総合問題」、第2次試験で課題論文及び面接試験を課して行われました。

志願者 350名（倍率70.0倍）

第1次選抜受験者 321名

第1次選抜合格者 30名

第2次選抜合格者 6名（追加合格者1名含む）

入学者 5名（入学者出身大学(学部)内訳：国立大学2名、私立大学3名（上記5名の内、大学院修士修了者2名、博士修了者1名）

◆ 平成15年度医学部入学者状況 ◆

平成15年4月8日(火) 本学の入学式に引き続き、午後1時30分から医学部入学式が行われました。

今年度の入学者は95人で、前期日程定員80名に対し志願者411名(倍率5.1倍)、後期日程定員15名に対し志願者254名(倍率16.9倍)でした。

入学者のうち道内高校出身者数、現役、女子学生の過去5年間の内訳は右のとおりです。

年度	15	14	13	12	11
道内高校出身者数	29	34	31	39	38
現役学生数	25	37	28	35	40
女子学生数	22	24	15	19	26

◆ 医師国家試験合格状況 ◆

第97回医師国家試験の合格者について、4月24日(木) 午後2時に厚生労働省(札幌第一合同庁舎内:北海道厚生局)から発表され、全体の合格率は、90.3%(国立大91.4%、公立大94.4%、私立大88.4%)でした。

本学部の合格状況は右のとおりです。

	受験者数	合格者数	合格率
新卒	93名	90名	96.8%
既卒	7名	3名	42.9%
合計	100名	93名	93.0%

◆ 第2回共用試験トライアル行われる ◆

平成17年度から本格運用される共用試験C B T(Computer based testing)の第2回トライアルが第5学年全員を2グループに分け、4月24・25日の2日間実施されました。

今回のトライアルは、本格運用により近い方法で、1ブロック1時間の問題を6ブロック6時間の予定で実施され、トラブルもなく無事終了いたしました。

◆ 平成14年度 財団法人等からの各種助成採択状況 ◆

(単位:千円)

財 団 法 人 名	種 別	件 数	交 付 額
(財)武田科学振興財団	研究助成	1	2,000
(財)北海道科学技術総合振興センター	研究開発助成	3	3,845
(財)金原一郎記念医学医療振興財団	研究助成	1	500
(財)カシオ科学振興財団	研究助成	1	1,000
(財)小野医学研究財団	研究助成	1	1,000
(財)上原記念生命科学財団	研究助成	2	7,000
(財)中富健康科学振興財団	研究助成	2	2,000
(財)北海道老年医学研究協会	研究助成	1	400
(財)北海道大学クラーク記念財団	研究助成	1	500
(財)アサヒビール学術振興財団	研究助成	1	700
(財)日本科学協会	研究助成	1	550
山口分泌疾患研究振興協会	研究助成	1	1,000
(財)住友生命社会福祉事業団	留学助成	1	2,000
(財)伊藤医薬学術交流財団	留学助成	2	600
"	海外学会出席助成	4	800
"	海外研究者招へい	3	600
"	学会開催助成	1	400
(財)三井生命厚生事業団	研究助成	1	1,500
(財)秋山記念生命科学振興財団	研究助成	2	1,500
(財)医用原子力技術研究振興財団	研究助成	1	1,000

※ 財団等から研究科長へ通知があった分のみ掲載

◆ 平成15年学会案内 ◆

1. 学会等名: 第42回日本エム・イー学会大会
2. 担当分野名: 医学・生物学・数理工学
3. 開催予定年月日: 平成15年6月3日(火)～5日(木)
4. 会場: 札幌コンベンションセンター
(札幌市白石区東札幌6条1丁目)
5. トピックや目的: 「21世紀の医学・医療におけるBMEの役割」をメインテーマとして、日本エム・イー学会として成果をいかに社会に還元しうるかを中心に討論が行われる予定。招請講演にNIBIBディレクター、Roderic I. Pettigrew先生、特別講演に1998年ノーベル医学・生理学受賞者Louis J. Ignaro先生、「1分子過程プロジェクト」で高名な大阪大学柳田敏雄先生を招聘。特別企画として、プレナリーセッション「生命現象の統合的認識」、シンポジウムでは「ナノメディスン」、「バイオイメージング」、「創薬」、「メディカルインフォマティクス」、「再生医療」、他にNEDOフォーラム「医療福祉」などをテーマにご議論いただく予定
(学会HP: <http://www.e-convention.org/me2003/>)

1. 学会等名: 日本外科学会総会定期学術集会
2. 担当分野名: 癌診断・治療学講座 腫瘍外科学分野
3. 開催予定年月日: 平成15年6月4日(水)～6日(金)
4. 会場: 札幌市 札幌厚生年金会館 ほか
5. トピックや目的: 「科学性に基づく外科学の将来展望」をテーマとして外科学全般にわたり、エビデンスに基づく外科治療は何かを議論する。会長講演「癌外科の近未来を

拓く」

1. 学会等名: 第26回日本がん疫学研究会・第10回日本がん予防合同研究会
2. 担当分野名: 予防医学講座公衆衛生学分野
3. 開催予定年月日: 平成15年6月23日(月)～25日(水)
4. 会場: 北海道大学学術交流会館
5. トピックや目的: 疫学ワークショップ「職業・環境がんの疫学－低濃度(レベル)曝露下でのリスク評価の現状と課題」。教育講演「健康と環境: リスク評価のデータサイエンス」柳川 堯 九大教授。特別講演「チトクロームP450の遺伝的多型の薬理的・毒性学的インパクト」鎌滝 哲也 北大教授。シンポジウム「遺伝子多型と発がん－がん予防との接点を求めて」。特別講演「感染発がんの分子機構: とくに炎症性ニトロ化反応と増殖性スーパーオキシドの生成」前田 浩 熊大教授。シンポジウム「食とがん予防」

1. 学会等名: 北海道整形災害外科学会
2. 担当分野名: 整形外科分野
3. 開催予定年月日: 平成16年1月25日・26日
4. 会場: 北海道大学学術交流会館

1. 学会等名: 骨軟部吸収性材料フォーラム2004
2. 担当分野名: 整形外科分野
3. 開催予定年月日: 平成16年3月20日
4. 会場: 北海道大学学術交流会館小講堂

◆ 北海道医学会入会のご案内 ◆

北海道医学会は、北大医学部が自ら主宰する学会として1923年に北海道医学会が発足しました。以後、札幌医科大学、旭川医科大学も参画し、道内主要病院も参加し、現在に至っています。

1. 活動状況

- 1) 機関誌(北海道医学雑誌)の発行
学位論文を始めとして原著、症例報告、総説などを掲載し、年6回発行しています。
- 2) 北海道医学会賞

会員のうち、優れた研究を発表した若手研究者に贈呈されます。

3) 北海道医学会シンポジウムの開催

道内3大学の協力を得て、一般市民を対象として開催しています。

2. 入会のご案内

ご入会はいつでも受け付けております(年会費3,000円)。院生、若手の研究者の皆さんにご入会をお勧めいたします。詳細は事務局までお問い合わせ下さい。

— Home Page のご案内 —

医学部広報は

<http://www.med.hokudai.ac.jp/medonly/ko-ho/index.html>

でご覧いただけます。また、ご意見・ご希望などの受け付け電子メールアドレスは、

ko-ho-office@med.hokudai.ac.jp

となっております。どうぞご利用ください。

北海道大学大学院医学研究科／医学部

発行 北海道大学医学研究科広報編集委員会
060-8638 札幌市北区北15条西7丁目
連絡先 医学部庶務掛 電話 011-706-5003
編集委員 澤口 俊之、安田 和則、菊田 英明
小橋 元、佐藤 松治

編集後記

広報19号をお届けします。今年度1年間、編集委員長を務めさせていただきます澤口です。編集委員の先生方、庶務掛と連携してよりよい『広報』づくりを目指していく所存です。どうぞよろしくお願いたします。今号は平成15年度初めの広報ということで、研究科長再任のご挨拶、各教授からは退官、就任のご挨拶をいただきました。今後は、独立法人化を迎え医学研究科・医学部も色々と大変なことと思われませんがそのあたりの記事も積極的に掲載し、また、医系総合棟も建つ予定であり改修も進むのでその関連記事も載せていく予定です。(澤口俊之)